

Title	『観音冥応集』の性格と研究の課題
Author(s)	山崎, 淳
Citation	語文. 2008, 90, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69102
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『観音冥応集』の性格と研究の課題

山 崎 淳

はじめに

蓮体(寛文三〜享保十一年・1663〜1726)は、河内に生まれ、庶民教化に尽力した真言僧である。その編著、『観音冥応集』(以下『冥応集』)六卷十二冊^②は、近世仏教説話の一大宝庫であり、古代・中世説話の近世における展開を探る格好の資料でもある。後世に与えた影響も大きい^③。

この『冥応集』については、平成18年に『宝永版本 観音冥応集 本文と説話目録』(以下『宝永版本 観音冥応集』)が刊行され、全文の通覧が可能となった。稿者は、同書の「解説」を担当したが、紙数の関係上、基礎的研究として触れるべき多くの点を割愛した。そこで本稿では、いくつかの観点から、改めて『冥応集』の性格を浮き彫りにし、あわせて研究上の課題を提示していきたいと思う。

一 「冥応集」の成立

『冥応集』巻一には宝永二年(1705)、巻六には宝永三年の刊記がある。宝永六年版『増補書籍目録大全』や『享保書籍目録』(享保十四年[1729]刊)によれば、『冥応集』は前集と後集から成る。実際、『冥応集』巻四内題下には「後集一」とある。したがって、巻一〜三(前集)が宝永二年刊、巻四〜六(後集)が宝永三年刊と考えてよいだろう。

次に、『冥応集』の執筆動機を確認してみよう。蓮体は、『冥応集』巻一「叙」の冒頭で、「自分は『法華経』観世音菩薩普門品を六回、『地藏経』を七回講義した。地藏の験記はすでに備わっている。常に嘆いているのは、日本は観音が垂迹した国であり、その靈験が非常に多いのにもかかわらず、記録の集成がないことだ」といった内容を述べている。観音説話集を世に出すことは、まさに蓮体の悲願だったといえる。

蓮体が特に普及に力を入れたのは地蔵・観音信仰である⁽⁸⁾。右の「叙」が記すように、「地蔵ノ験記」である蓮体編の地蔵説話集『礦石集』は、元禄六年(1693)に刊行されている。注目されるのは、その『礦石集』巻一第26話において「地蔵・如意輪観音一休説」が示され、また、同書巻一(全三十二話)に、五話の観音説話(このうち第25話前半は、『冥応集』巻五第33話に転用)が収録されていることである。『礦石集』成立の時点で、観音説話集がすでに構想されていた可能性も考えられるだろう。

成立に関しては、巻数も注目される。『冥応集』は全六巻だが、予定では長谷寺説話に充てる二巻分を加えた八巻だった⁽¹⁰⁾。これは、巻一「叙」の「巻重リテ六ツ七ツ八葉ノ心連ヲ開シメ玉ヘト、名テ冥応集ト云」(傍線山崎、以下同じ)や、「(長谷寺の)靈験殊ニ多ケレバ、末ノ二巻ニ詳ニ記ス」(五4。以下、巻数・説話番号はこの形で示す)といった予告的文言から判明する。

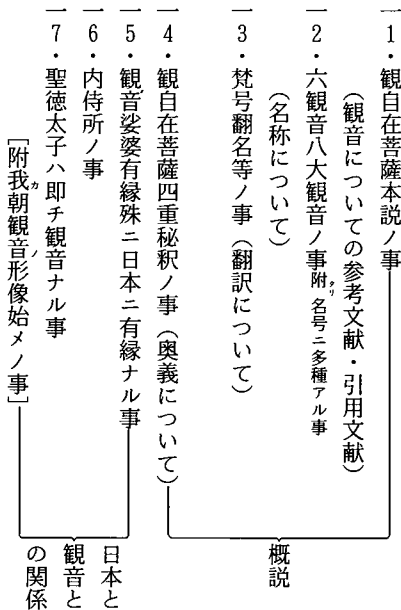
最終的に六巻となった点については、『冥応集』巻六末尾に、「此集、雖レ可有二八卷、末二卷、顯長谷寺靈験也。現以有梓行本、不勞記焉」との言及がある。すなわち、長谷寺に関する同類の本が出版されており、二巻分は取りやめとなったのである。長谷寺関係の書としては、『長谷寺靈験記』が承応二年(1653)に刊行されている。同類の本がこれなのか、即断はできない。確実なのは、『冥応集』の長谷寺特集巻が幻に終わったということである⁽¹¹⁾。

もっとも、その二巻分を除いても、『冥応集』には百九十二話

(各巻冒頭の目録に基づく話数)もの説話が収録されている。一話中に複数話を含む場合もあり、実際の話数はさらに多い。『冥応集』成立に際し、「普門品ヲ講ズル事六回」(巻一「叙」)に及ぶ蓮体の許には、それだけの説話が蓄積されていたのである。

二 配列

「今此冥応集ニハ、…日本古今ノ靈応ヲ集メテ大成セント欲ス」(一1)とある通り、『冥応集』は一大観音説話集となっている。その初めの部分、すなわち巻一前半は、観音説話集と呼ぶにふさわしい形で構成されている。以下に概観してみよう。



一1〜4は、観音についての概説である。この概説が終わると、神代からの日本と観音との関係が説き起こされ、観音の化身たる聖徳太子、その時代に作られた日本最初の観音像へと話は及ぶ。そして一8からは、日本各地の観音靈驗譚や寺院縁起が具体的に展開していく。一1〜8は、極めて整然とした構成になっているといえよう⁽¹²⁾。蓮体は記事の配列に、非常に気を配っていたことがうかがえる。

次に、巻四を例にして、説話配列を見ていくことにする。『冥心集』巻四前半（巻四本）では、中山寺の観音に関する説話が多く収録されている。以下に巻四前半のうち、四1〜13の簡単な内容を挙げる（関連すると考えられる要素を傍線・四角囲み等で示した）。

四1〜7↓撰州中山寺の十一面観音（四5は中山寺の秀鏡の

話。四6、7は光明真言の利益。四7は嫉妬の

話）。

四8↓前半の舞台は撰州。光明真言の利益。ある娘の病気は、

嫉妬怨念の鬼の所為。後半は、嫉妬深い妻が登場。

四9↓嫉妬心が無い大内義隆妻・貞子。

四10↓嫉妬深い北条政子。追放された頼朝の愛人（妊娠中）、

住吉への途次、雷雨甚風に遭うが、狐火のおかげで無

事出産（地蔵の感応）。

四11↓大蛇を殺した男が怪異に遭う。中山寺の秀鏡に相談。

秀鏡、殺業を懺悔して、中山寺の観音と琰摩天に祈る

よう男に勧める。

四12↓猫神の祟り。野干の祟り。野干が武士を恐れ逃げる。

四13↓漁を生業とする男、観音を念じて洪水から助かる。中山寺で観音に奉仕し、深く殺業を慚愧して出家。

右に挙げた説話の中には、中山寺の観音に関連しないものもある。四8以降の数話に中山寺は登場せず、四10に至っては、場所が住吉である上に地蔵説話である。

注目したいのは、四7〜10が「嫉妬」(二重傍線)、四10〜12が「動物」(波線)の要素で共通することである。また四11では、祈る対象として、観音のみならず閻魔天も挙がっている。周知の如く、地蔵と閻魔は同体と見なされている。このことで、四11と地蔵説話である四10との連結がより確かなものになると考えられる。以上のような流れの中、中山寺は四11で再登場する。『冥心集』巻四前半は、途中で中山寺から離れていくようでありながら、説話中の要素の連結により、再び中山寺に帰ってくる配列であることが理解されよう⁽¹³⁾。この配列によって、『冥心集』の観音説話集としての面目が保たれることになるのである。

卷四の例を、もう一つ挙げておこう。卷四後半(卷四末)冒頭

二話の題目は、「光明皇后、玄昉僧正、並ニ観音ノ化身ナル事」(四一七)、「備中宝泉寺ノ観音ノ縁起、並ニ報恩大師ノ事」(四一八)である。ともに観音説話であり、並ぶことに問題はないかもしれない。ただ、光明皇后の説話と中国地方の寺院に関する説話との間にどのような関係があるのか、気になるところではある。そこで取り上げるのが、両話の次の部分である。

・(朝廷が玄昉に対し)アマリ尊敬甚シケレバ、藤原ノ広嗣ト云者、讒シテ、玄昉、光明皇后ト密通シ玉フト奏スルニ、
(四一七)

・備中国都宇郡矢部村日差山宝泉寺ハ孝謙天皇ノ御宇ニ報恩大師ノ開基ナリ。(四一八)

四一七の傍線部は、玄昉と光明皇后が密通したという讒言である。四一八の傍線部によれば、宝泉寺の開基は孝謙天皇の治世である。孝謙天皇は、聖武天皇と光明皇后の娘であり、時間的連続がここに認められる。さらに孝謙天皇(称徳天皇)といえは、道鏡への寵愛が想起される。四一八に道鏡が登場するわけではないが、蓮体が四一七の後に18を置いたのは、玄昉―光明皇后、道鏡―孝謙天皇という類似する関係も意識したからではないだろうか。

このように蓮体は、様々な素材を駆使し、説話を緊密に配していることがうかがえる。もちろん、説話配列にどのような意識が働いたかについては、他の巻も含め、さらに考察の余地がある。今後の課題の一つである。

三 読者を惹きつける工夫

稿者は旧稿において、三八「和光ノ方便ニ依テ愛執ヲ離ル、事」(出典は『沙石集』)に見える和歌的表現を基調とする美文は、蓮体が『太平記』の美文を利用して増補したものであることを指摘した。

三八に限らず、和歌的な修辞は、『冥心集』の特色の一つとなっている。例えば、五九「金剛山実相院舜海僧正ノ修験並ニ真言ノ功力疫神ヲ禳フ事付タリ五宮ノ御室及ビ地藏ノ靈験ノ事」には、

瘧病ヲ煩フ者モ、(光明真言加持の)土沙ヲ服スレバ、宛
越智ノ泰澄ノ修験ニ因ミテ、①心ニ移リ行ヨシナシ言ヲ、ソ
コハカトナク石間寺ノ叡効、児ガ獄ノ雲識ガ、身ヲ捨シコソ

②葛木ヤ、其岩橋ノ言ズトモ、心ノ中ハ久米ノ谷水ノ流レ、

③疫神退散ノ物語マデヲ、取次ニ書続ルモノナリ。
このように表現が見られる。出典名はないものの、傍線部①は明らかに『徒然草』を踏まえている。和歌に基づくものではないが、古典作品を利用し、かつ「ソコハカトナク」に続く「石間寺」を、「言う」との掛詞にしている点で、和歌的修辞に連なるといえる(その前にある「越智」も、「病が」落ち(治る)との掛詞)。傍線部②の方は、『林葉累塵集』(下河辺長流編 寛文十年〔1670〕刊)巻第十一・恋歌一の「葛城やそのいは橋のいはずともふかきころはくめの谷水」(768番・忍恋を 忠頼)という和歌に極め

て近い。久米の岩橋伝説を踏まえる和歌は珍しくないが、ここのま
で重なるものは管見の限り見出せない。

これらの箇所は、蓮体の表現上の嗜好を示しているといえる。
と同時に、読者にとっては、心地よく響いてくるものであったと
推測される。

『冥心集』の和歌的修辭は、右に挙げたような、ある程度の長
さを持つものが多いが、次に挙げる、二四「泉州植尾山千手観音
並ニ吉祥天女靈異ノ事」の如き例もある。

是千手ノ靈驗定テ多カラント、
僧僧ニ尋ネケレド、
餘醜ノ
花色衣ナリ。

二四は、複数の話題から構成されている。傍線部は、そのうち
の一つの末尾である。これが、『古今和歌集』巻第十九・雑体・
誹諧歌の「山吹の花色衣ぬしやたれ問へど答へずくちなしにし
て」(102番・題しらず 素性法師) に基づいていると指摘するこ
とはたやすい。むしろこの例では、和歌の一部を提示して、言わ
んとするところを想起させる言葉遊びになっていることに注意し
たい。話の末尾に置かれた謎めいた言葉によって、読者はいつた
ん立ち止まり、それを解く楽しみを得ることになるといえよう。
『古今和歌集』前掲歌の波線部を踏まえれば、意味は「千手観音
の靈驗を寺僧に尋ねたが」寺僧は何も答えてくれなかった」とな
る。

次の例は、二四の「附タリ」、「吉祥天女ノ本説並ニ利益ノ事」
の末尾である。

左ハ言ド近年ノ米ノ貴(ニ高)ニ叶フベキ事ナラバ、
彼米囊
誰モホシキモノナリ。
叶ネバコソ浮世ナレ。呵呵呵。

当該箇所の前には、使っても中身が減らない米囊を吉祥天女か
ら得た江諸世(出典は『元亨釈書』巻第二十九)や、同種の米囊
を龍宮から得た依藤太(出典は『太平記』巻第十五)の説話が記
されている。「彼米囊」はそれらを踏まえる。『冥心集』が出版さ
れた宝永頃は、米価が高騰していた時期である。締めくくりにこ
うした時事ネタを折り込み、冗談めかして終わることで、往古の
説話は、当時の読者にとって身近なものとなるといえる。

なお、波線部「叶ネバコソ浮世ナレ」は、謡曲『安宅』・「仏
原」・仮名草子『恨の介』(慶長十四年[1609]以後成立か)下
『浮世物語』(寛文五年[1665]頃刊か)巻一「浮世といふ事」など
にも見え、人口に膾炙していたものと考えられる。したがって、
このフレーズが用いられること自体に不思議はない。ただ、『浮
世物語』に「思ふ事叶はねばこそ浮世なれ」といふ歌も「侍べり」
とあること、『恨の介』において美文調の中に使われていること
などを考え合わせると、この箇所も、これまでに触れてきた和歌
的修辭に数えることができるだろう。

以上の諸例に、読者を惹きつけるための蓮体の工夫を認めてよ
いだろう。あるいはこれらは、蓮体の説法の実態が反映された箇
所と捉えることもできるのではないだろうか。

四 連体の取材源

『冥応集』一1には、「援引書目」として次の三十三種の作品が挙げられている。

類聚国史、日本靈異記、元亨釈書、日本往生極樂記、都率上生録、和論語、古今著聞集、宝物集、今昔物語、撰集抄、沙石集、宇治拾遺物語、前太平記、保元平治物語、源平盛衰記、北条九代記、太平記、長明發心集、長谷寺靈驗記、異国襲來記、観音靈驗記、観音新驗録、七観音鼓吹、地藏靈驗記、地藏利生記、地藏利益集、古事因縁集、因果物語、通念集、為愚癡物語、鎌倉志、泉州志、四国辺路道指南

三十三は、「観音の三十三身」の如く、観音にちなむ数字であり、利用された作品の実数ではない。連体も、右の列挙に続き、「此外諸寺諸山ノ縁起旧記等ハ別ニ挙ズ」と断っており、実際に利用された文献は、さらに多かつたことがわかる。

例えば『明恵上人伝記』は、「援引書目」に見えないが、六四「梅尾ノ明恵上人ノ事」に使われている。その中では、「出家の人」は「和書ニハ明恵伝ヲバ必ズ見ルベシ」という評価も見える。『壺囊鈔』(二4・泉州槇尾山千手観音並ニ吉祥天女靈異ノ事)、『雍州府志』(三5・京都感応寺ノ観音ノ事)なども、本文に書名が記されており、利用が確認できる。その他、前節の五9での例

〔徒然草〕『林葉累塵集』と同様、本文にも「援引書目」にも書名はないが利用されているとおぼしい作品もある。

さて、『冥応集』が用いた古代・中世の作品中、ひときわ目立つのは『元亨釈書』である。同文的一致が認められる説話も、相当数にのぼる(例えば、三5「京都感応寺ノ観音ノ事」、六26「源尊法師冥土ニシテ観音ノ引撰ニ預ル事」など)。

連体は、二16「祈親和尚観音ノ告ニ依テ高野山ヲ再興シ玉フ事」に、

金剛峯寺ノ再興ハ、実ニ祈親(持経上人)ノ力ナリトイヘリ。サレバ釈書ニモ祈親ノ伝ヲバ感進ニモ入ズ、檀興ノ科ニ入ラレタリ。

とあるように、『元亨釈書』の編集姿勢に強い信頼感を持っていたようである。また、五19「播州清水寺千手観音ノ事」の、

釈書ノ二十八ニ犬寺トアリテ、清水寺トハ言ズ。何ノ時ヨリカ、清水寺ト号セルヤラン不審ナリ。

のように、現状(寺名「清水寺」)が『元亨釈書』(寺名「犬寺」と一致していない場合、現状を認めながらも(説話題目に「清水寺」)、『元亨釈書』に触れることを忘れていない。『元亨釈書』は、連体が常に意識する、一つの基準であったといえるだろう。

ただし、無批判に『元亨釈書』を受け入れていたわけではないこともうかがえる。三25「丹後成相寺千手観音、並ニ殺生肉食ヲ戒ルノ事」では、説話の舞台に関して、

(成相寺は)康頼ノ宝物集ニ丹後トイヘリ。釈書ニハ周防ノ

三井寺トイヘリ。蓋シ似タル事二処ニアリケルヤラン覚束ナシ。

と、他書と比較し、不審な点への私見を述べている。先ほども触れた六四の明恵説話においても、「釈書ノ伝ハ最略ナリ。別伝記三卷ニ詳ナリ」と、やはり他書との比較を行っている。「元亨釈書」は、『冥応集』の出典として看過できないだけに、利用の様相についてはさらに分析を積み重ねていく必要がある。

次に、近世成立の依拠資料として、二つの例を挙げる。一つは『観音新験録』（月潭道澄 元禄九年〔1696〕刊。以下『新験録』）、一つは、『四国徧礼功德記』（真念 元禄三年〔1690〕刊。以下『功德記』）である。

『新験録』は、「援引書目」の中に見える。蓮体が確実に参照していた作品である。『冥応集』に、この『新験録』からの採録話があることについては、すでに指摘がある。今回、改めて確認したところ、『新験録』の全四十七話中、三十八話が『冥応集』と類話関係にあることが判明した。これは、『新験録』で「附属」となっている最後の九話分を除くすべてである。両作品の比較など、考察を進めるべき点は多いが、『冥応集』にとって『新験録』が重要な種本であったことは疑いない。

一方、『功德記』の名は、「援引書目」にも本文にも見えない。しかし、五八「石間寺ノ叡勅捨身並弘法大師雲識カ捨身ヲ救玉フ事及ビ清水ノ舞台ヨリ捨身セル人ノ事」における、「僧雲識が、延宝九年〔1681〕に、讃岐の出釈迦岳から捨身すると、黄衣の僧

（弘法大師とされる）が現れ雲識を救った」と同内容の説話が、『功德記』には収録されている。『冥応集』では、説話の冒頭は、

又延宝ノ初ニ、備後ノ国安名ノ郡曾禰原村宝泉寺ノ弟子、雲識ト云僧年十八歳ナリシガ、心少シソゴロニテ定レル事ナシ。然レドモ深ク弘法大師ヲ信ジ奉リケレバ、

となつている。『功德記』の当該部分は、

備後国安名郡曾禰原村宝泉寺の弟子雲識といふ僧、年十八になりしが心すこしすゞろにてさだまれる事なし。しかれども大師を深く信じける。

である。小異はあるが、書承関係を想定できるほど酷似している。これ以降もほぼ同じ内容・表現である。『功德記』は、『冥応集』の出典と認定してよいだろう。

このように『冥応集』には、古今の多彩な文献資料が用いられているが、この点とともに、蓮体自身による各地の見聞譚が豊富なことも特筆すべきである。地元河内はもとより、中国、四国、江戸等での見聞譚は、近世仏教説話研究にとって大きな鉱脈となることが期待される。

蓮体は、庶民教化のため各地を訪れている。そのことが見聞譚収集の一つの契機になったといえる。しかし根元には、蓮体の叔父にして師であり、「近世における真言教法の再興者」とされる浄厳（寛永十六〜元禄十五年・1639〜1702）の存在を考えておかねばならない。

蓮体編『浄厳大和尚行状記』（元禄十五年成立。上下二巻。以

下『行状記』巻上・延宝五年(1677)九月二十九日条には、浄厳の化導や靈験を記録するよう、蓮体が父玄沢から言われたと記されている。果たして、蓮体が集めた浄厳の靈験のいくつかは、『冥応集』に取り込まれることになる(例えば、『浄厳大和尚靈徳記』「和尚筆跡ノ眞字不思議ノ事」は、『冥応集』四30の出典)。また、『行状記』巻上・延宝六年三月二十六日条からは、浄厳の四国への布教の旅に、蓮体が随従していたことがわかる。四国を舞台とする説話のいくつかは、その時に入手した可能性がある。『冥応集』の見聞譚は、師浄厳の存在があったからこそ、蓮体の許に集まってきたといってもよいだろう。

ところで、見聞譚については、前掲の靈識の説話(五8)が注意される。『冥応集』では、当該説話の末尾近くに、「予其年讃州高松ニ住シテ、明ニ寺僧ノ説ヲ聞リ」と、見聞譚である旨が記されている。もっとも、先述したように当該説話は『功德記』を踏まえていると考えられる。おそらく蓮体は、高松で実際にこの話を聞いたのだろう。その数年後、かつて聞いた話に書物を通じて再会し、それを『冥応集』に引用したというところではないか。この例は、見聞譚として記されていても、その説話を見聞譚の直接的な記載と判断することに、慎重な態度を迫るものである。同時に、蓮体が文献資料と見聞譚を縦横に駆使していることを示す、象徴的な例ともいえる。

おわりに

以上、『冥応集』について、その性格と研究における課題とを提示してみた。今後は、本稿で提示した課題を踏まえ、個々の説話について分析を深め、その上で『冥応集』という作品を総体として捉えていくことを目指したい。

注

(1) 『国書総目録』第二巻(補訂版 平成元 岩波書店)に『観音冥応集』・『観自在菩薩冥応集』として挙がる。前者「一みょうおうしゅう」、後者「一めいおうしゅう」。原本の振り仮名に従えば、「みょうおうしゅう」と読むべきだろう。現時点で確認できる『冥応集』の所在は以下の通り。大谷大、京大、種智院大、高野山宝城院、旧三井、吉田幸一氏、地蔵寺、信多純一氏、東海女子短大関山、宮城教育大、鹿沼大樺(三好龍肝氏)『真言密教靈雲寺派関係文献解題』「昭和51 国書刊行会」・『国書総目録』第二巻・『古典籍総合目録』第一巻「平成2 岩波書店」による)、延命寺(同寺宝物館の展示にて確認)。

なお『国書総目録』には、『観自在菩薩冥応集』が宝永年間刊・地蔵寺蔵として挙がる(同寺は蓮体入寂の地)。「冥応集」関係で現在同寺に所蔵されるのは、『冥応集』巻三後半、巻四後半(巻四末)、巻五前半(巻五本)の三冊である(後二者には「観音冥応後集」の題簽)。「一統」の名称は、行武善胤氏『靈雲叢書解題』(大正5 丙午出版社)に基づくか。また『国書総目録』には、蓮体の著作として「観音新験録冥応集」が挙がる。『国書総目録』が基にした『享保書籍目録』(享保十四年[1729]刊)では、

『観音新験録』『同冥応集』『同西国霊場記』『同霊験真鈔』の順で並ぶ。三番目は厚巻『西国三十三所観音霊場記』（享保十一年刊）、四番目は松譽『観音霊験記真鈔』（宝永二年〔1705〕刊）のことである。『同冥応集』の「同」も、「観音」と見るのが自然だろう。

『観音新験録冥応集』は存在しないかと考えるべきである。

(2) 各巻二分冊。巻四、六は、各巻冒頭の目録によれば、それぞれ「本」「末」に分けられている。「本」は一分冊目、「末」は二分冊目に対応する。

(3) 『冥応集』や蓮体についての主な先行研究は、山崎『観音冥応集』出典考―巻第三八話を例として―（『詞林』41 平成19・4）に掲出したが、上田靈城氏「近世仏教の庶民教化―仏教説話の流れ―」（講座元禄の文学1『元禄文学の流れ』平成4 勉誠社）を補訂する。近時のものに、池上海一氏「勝尾寺百済王后説話の構造と伝流―対外霊験譚研究の一環として―」（『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』7 平成19・3）、松本昭彦氏「『観音冥応集』の中国故事・説話」（『三重大学教育学部研究紀要』58〔人文科学〕平成19・3）、中川真弓氏「『観音冥応集』と宝泉寺縁起―蓮体の備中における書写活動をめぐって―」（『詞林』41 平成19・4）などがある。

(4) 注3上田氏論考には、妙幢淨慧「仏神感應録」（宝永七、八年刊）など、『冥応集』の早い時期の受容例が挙げられる。稿者が見出したものでは、『西国三十三所観音陀洛伝記』（昌阿法談・了随説法・夢齋聞書 寛延二年〔1749〕成立）巻五「出雲坊観世・首の利生を蒙る事」に「観音妙応集（＝冥応集）に右安元と同じ様な事有り」、『播州御嶽山清水寺縁起』（宝暦三年〔1753〕の書写識語。天川友親編『播磨万宝智恵袋』（宝暦十年成立）巻十所収）に「霊験記及冥応集等ニハ」と、『冥応集』への言及がある。

(5) 神戸説話研究会編・和泉書院刊。本文の引用は同書による（引用に際し振り仮名は省いたが、一部残した箇所がある）。同書の底本は同志社女子大学蔵本で、書誌的情報は『宝永版本 観音冥応集』の「凡例」参照。

(6) 中原香苗氏との共著。蓮体の生涯・著作については中原氏、『冥応集』所収説話については山崎が執筆。

(7) 巻一刊記に挙がる書肆は小嶋勘右衛門・毛利田庄太郎、巻六刊記では前二者に柏原清右衛門が加わる。蓮体と書肆の關係については、西島孜哉氏「出版禁令と書肆・作者―『礦石集』を題材として―」（『鳴尾説林』4 平成8・9）、羽生紀子氏「大坂出版界の具体相―西鶴の周辺―」（『西鶴と出版メディアの研究』第二章 平成12 和泉書院）参照。

(8) さらに光明真言・宝篋印陀羅尼信仰が加わる。上田靈城氏「近世真言宗の庶民教化―来世信仰―」（『密教文化』99 昭和47・6）参照。

(9) 同時代の例には、必夢『延命地藏菩薩直談鈔』（元禄十年〔1697〕刊）巻十第22話「地藏如意輪観音一身分身述」がある（『礦石集』と『延命地藏菩薩直談鈔』は同文。影響関係あるか）。古い例では、『溪嵐拾葉集』巻第百五「慈恵大師二童子事」の「地藏如意輪一身体也」（大正蔵七六85中）がある。

(10) 西田耕三氏「近世説話集10の解説」（『国文学』49 5 平成16・4）で、後述する巻六末尾の文言を踏まえ、長谷寺用の二巻分取りやめについて言及する。

(11) ただし、現行の『冥応集』には、長谷寺説話も収録されている。
(12) 『礦石集』の「叙」の後には、「地藏菩薩女人ノ横死ヲ救ヒ玉フ事」という説話がくる。地藏についての概説（『地藏菩薩梵号ノ秘釈附タリ勝軍地蔵ノ事』『地藏菩薩四重秘釈ノ事』）は、最終巻（巻六末）末尾にある。『礦石集』の配列についても考える必要がある

が、単純に比較すると、概論から具体例に入っていく『冥心集』の構成の方が整理されている印象を受ける。なお『礦石集』については、塚田晃信氏「蓮体の礦石集—近世唱導説話の「光芒」—」（東洋大学「文学論藻」52 昭和52・12）が、「統一された構成・一貫したテーマによる説話集を編纂しようとする意図が明確に存したか疑わしい」としつつ、「各説話を連結する連鎖的素材が配置されている」と指摘する。塚田氏の後者の指摘は、『冥心集』の説話配列（後述）と通じるものである。

(13) 四11における「大蛇」は、四7〜10の「嫉妬」と繋がる要素とも考えられる。この点は、現在『冥心集』を輪読している神戸説話研究会においても議論された。

(14) 四12と四13に、明確な繋がりは見出せていない。ただし四11と四13には、「中山寺」のみならず「殺業への反省」（点線四角囲み）という共通点がある。四12は、巻頭の目録では題目の初めに「附タリ」とあり、四11の付属説話という位置付けである。この点から、四13は四11に関連付けられていると見ることができ。『宝永版本 観音冥心集』には、柴田芳成・橋本正俊両氏作成の説話目録が収録され、説話の繋がりや流れが把握できる。今後の大きな指標となるだろう。

(16) 注3 山崎論考。

(17) 松誉『西国編 観音靈験記』（貞享四年〔1687〕刊）にも、「洛陽三十三番・天王寺の」当時の縁起は山吹のはな色衣なり」とある。したがってこの表現は、先行作品にすでに見えるものではある。しかしながら、蓮体の表現上の嗜好を示す一例であることに変わりはない。

(18) 『西鶴事典』（平成8 おうふう）418〜419頁参照。

(19) 小学館日本古典文学全集『仮名草子集／浮世草子集』（昭和46）の『浮世物語』巻第一一話・頭注六（148頁）参照。

(20) 堤邦彦氏「劬化本概説」（『近世仏教説話の研究』平成8 翰林書房）では三19、叢書江戸文庫「仏教説話集成「二」」（平成2 国書刊行会）西田耕三氏解題では四22、注10西田氏解説では六42が、「観音新験録」との重なりを指摘されている。

(21) 『冥心集』に見聞譚が多いことは、注20堤氏論考で指摘されている。

(22) 上田靈城氏「真言密教史上における浄嚴の位置」（『浄嚴和尚伝 史料集』昭和54 名著出版）

(23) 『浄嚴大和尚靈徳記』は、『行状記』下巻後半を構成する諸編の一つ。全十二話。注22上田氏「浄嚴和尚伝記史料集」の「伝記解題」参照。

(24) 『冥心集』と浄嚴・蓮体については、横田隆志氏「浄嚴と蓮体—『観音冥心集』所収延命寺説話とその背景—」（仏教文学会本部例会発表資料 平成18・12・9 於大阪府立大学）がある。

〔付記〕地蔵寺蔵書について貴重な御教示を賜った信多純一先生、地蔵寺蔵書閲覧に際し御高配を賜った同寺御住職堀智真師に、心より御礼申し上げます。本稿は、神戸説話研究会での輪読の成果を取り入れられている。また本稿は、仏教文学会本部例会（平成18・12・9 於大阪府立大学）の「小特集『観音冥心集』」において、総論部分を担当した発表「『観音冥心集』の世界」を骨子としている。神戸説話研究会会員諸氏、発表時に御意見・御質問を賜った方々に深く感謝いたします。

なお、『冥心集』の引用文には、現代の人権意識から見て不適切な語句が含まれているが、本作品の歴史的資料としての価値を鑑み、原文のまま掲出した。

— 本学招聘研究員・大阪工業大学非常勤講師 —